

台湾・韓国日本語学習者の日本語音声の 特徴と日本語教育への提言

馬 瀬 良 雄

はじめに

信州大学人文学部に在職した時、外国人留学生が学びに来るようになり、彼らに対する日本語指導、卒業論文・修士論文の指導を通じて、さらには日本人学生の中から日本語教育をテーマとする卒業論文・修士論文を書く者も現れるようになり、否応なしに日本語教育に関わらざるを得ないようになった。昨年4月、広島女学院大学に移ったが、学生の日本語教育への関心は高く、これについて以前収集した資料のまとめを紹介している。ここではその中から台湾と韓国の日本語学習者の調査資料をもとに、彼らの日本語音声の特徴を述べ、日本語教育へのささやかな提言を行いたい。

以下、次の順序で述べる。

1. 調査の概要
 2. 音声の特徴
 - 2.1 タ行子音とダ行子音
 - 2.2 ガ行鼻音
 - 2.3 「英語」の「英」、「生徒」の「生」の音声
 - 2.4 「十本」の「十」の音声
 - 2.5 特殊拍をめぐって
 3. アクセント
- おわりに

1. 調査の概要

1.1 調査対象・調査年月など

調査は、台湾と韓国で行った。前者は台北市郊外の輔仁大学外国語文學院日本語文学系、後者はソウルに近い清州大学校人文大学日語日文学科の学生を対象に行った。対象学年及び人員は次のとおりである。調査年月は1989年9月。

(台湾) 輔仁大学2年生50人、3年生30人、計80人⁽¹⁾⁽²⁾

(韓国) 清州大学校2年生43人、3年生36人、計79人

なお、調査時における日本語学習時間は次のとおり。

輔仁大学 2 年生450時間、3 年生850時間

清州大学校 2 年生500時間、3 年生900時間

なお、新学年は台湾では9月、韓国では3月に、それぞれ、始まる。台湾で学習時間が韓国よりも少ないのはそのためである。

1.2 音声・アクセントの調査方法について

音声とアクセント調査はいずれも聞き取る調査によって行った。以下、そのあらましについて述べる。

1.2.1 音声調査

音声調査は次の3種類からなる。

1 四つの短文の選択肢を示し、テープの中で読んでいるものを選ばせる方法。例えば、

(a) ころものです。 (b) このものです。

(c) こどもです。 (d) ことものです。

の選択肢を示し、テープからは「こどもです」を流し、(a)(b)(c)(d)のどれかに記号をつけさせる。

2 ある単語を示し、テープから流れる4通りの音声の中から、その単語として最もよいと思うものを選ばせる方法。例えば、「生徒」という単語を示し、テープから次の4通りの音声を流し、最もよいと思うものに記号をつけさせる。

(a) [seito] (b) [seido]

(c) [se: do] (d) [se: to]

3 テープの中で発音している単語を平仮名または片仮名で書き取らせる方法。例えば、[daigaku] と発音しているテープを流し、その音声を平仮名または片仮名で書かせる。

1.2.2 アクセント調査

アクセント調査は次のように行った。

あらかじめある単語を含む短文を示し、標準語として存在するアクセントの型で発音したテープを流し、「よい」と思うアクセントを一つ選んでもらった。「標準語として存在するアクセントの型」とは、2拍名詞を例にとれば、○●▼、○●▽、●○▽の三つの型を指す。今、調査語の中から「花」を例にあげれば、テープから流れる次

の中から一つを選び、回答してもらった。

(a) ハナカ°アカイ (b) ハナ¹カ°アカイ (c) ハナカ°アカイ

なお、アクセントでは選択肢として「分からない」を設けた。

調査語は1拍語4、2拍語6、3拍語4の計14語。1・2拍語では同音異義語による組み合わせとした。調査語は次のとおりである。

日・火、葉・歯、飴・雨、橋・箸、鼻・花、頭、卵、涙、桜

2. 音 韻

2.1 タ行子音とダ行子音

2.1.1 音声環境からみた両子音の混同

タ行子音とダ行子音の混同の問題は、台湾の日本語学習者にとっても韓国の日本語学習者にとってもかなり深刻である。今、タ行子音とダ行子音を含むすべての調査項目を抜き出し、これを音声環境によって整理し、その正答値を示すと表1（次ページ）のとおりである。

表の中で「種類」とあるのは1.2.1で説明した問題の種類である。

この表は台湾・韓国ともに日本語学習者の両子音の混同が激しいことを浮き彫りにするが、両者は、仔細に見ると、音声環境によってかなり明瞭な相違点を持っているのに気づく。つまり一言で言えば、次のとおりである。

t- : 台湾 > 韓国 -t- : 台湾 < 韓国

d- : 台湾 > 韓国 -d- : 台湾 < 韓国

タ行子音・ダ行子音ともに、語頭では台湾が、語中では韓国が、それぞれ、成績がよいのである。唯一の例外は「体（からだ）」の3学年の数値である。では、なぜこのような現象が起こっているのか。

先へ進む前に、日本語・台湾語・韓国語の歯茎閉鎖音の特徴を見ておこう。

日本語では歯茎閉鎖音の系列に /t/、/d/ がある。標準語などでは次のように実現される。

/t/ : 語頭- [t] 軽微な有気音 (aspirated) を伴うことが多い。この軽微な有気音は必要に応じて [ʰ] で表わすことにする。

語頭以外- [t] 軽微な有気音はなくなる。つまり、無声無気音となる。

/d/ : 位置にかかわらず [d]

上で「標準語など」と言ったのは、例えば青森県方言などのように、/hata/ (旗) は [hada]、/hada/ (肌) は [ha~da] のように実現される方言もあるからである。

表1

音環境	項目	種類	学年	台湾	韓国
t -	天気	3	Ⅱ	98.0%	82.4%
			Ⅲ	100.0	72.2
- t -	また (副詞)	1	Ⅱ	32.7	93.0
			Ⅲ	53.3	86.1
	生徒	2	Ⅱ	72.0	93.0
			Ⅲ	50.0	88.9
	あなた	2	Ⅱ	56.0	81.4
			Ⅲ	30.0	55.6
デパート	3	Ⅱ	88.0	97.7	
		Ⅲ	79.9	100.0	
ボタン	3	Ⅱ	20.0	93.0	
		Ⅲ	33.3	91.9	
平均 (%)			Ⅱ	53.74	91.62
			Ⅲ	42.64	84.50
d -	だく (抱く)	1	Ⅱ	75.5	67.5
			Ⅲ	93.3	75.0
	大学	3	Ⅱ	77.6	67.4
			Ⅲ	96.3	69.5
	デパート	3	Ⅱ	84.0	39.4
			Ⅲ	83.1	39.0
平均 (%)			Ⅱ	79.03	58.10
			Ⅲ	90.90	61.17
- d -	子供	1	Ⅱ	89.8	93.0
			Ⅲ	86.7	94.4
	おどろく	2	Ⅱ	40.0	100.0
			Ⅲ	26.7	97.2
	体	3	Ⅱ	72.0	76.7
			Ⅲ	93.3	77.2
平均 (%)			Ⅱ	67.27	89.90
			Ⅲ	68.90	89.60

さて、日本語のタ行子音 (/t/) とダ行子音 (/d/) の弁別的特徴は、標準語などの場合、「無声」か「有声」によって示される。したがって「有気音を伴うか、伴わないか」といった特徴は非弁別的特徴に属する。「痛い！」を強調して言う時、「た」の子音 [t] は語頭以外の位置にあっても有気音を伴うことはしばしばであり、「だから言ったじゃないか！」などを強い調子で言う時には、「だ」の子音 [d] が有気音を伴うことは稀ではない。

次に台湾語の場合を簡単に述べよう。台湾語の歯茎閉鎖音の系列には、北京官話と同じように、有気音と無気音 (unaspirated) の対立がある。この有気音を [h] で表わすならば、[t^h] と [t] の対立である。この場合の無気音 [t] は声門閉鎖を伴うことが多く、これを [tʔ] で表わすことができる。ただし、弁別的特徴は有気音と無気音の対立であって、声門閉鎖の有無は弁別的特徴としては働いていない。

韓国語の場合はどうか。韓国語の歯茎閉鎖音は次の3系列から成る。日本語や中国語 (台湾語を含む) が2系列から成るのとは異なる。

(平音) ㄷ / t / [t-, -d-]

(濃音) ㄷˊ / tʔ / [tʔ-, -tʔ-]

(激音) ㄷᄇ / t^h / [t^h-, -t^h-]

平音の /t/ は語頭ではごく軽微な有気音を伴うことが多く、また、語頭以外では有声化して [d] となる。この点は先にあげた青森県方言などで /hata/ (旗) が [hada] として実現されるのと似る。また、濃音 /tʔ/ では声門閉鎖の有無が、激音 /t^h/ では有気音の有無が、それぞれ、弁別的特徴として働いている。例えば次のように。

[t a ɪ] (月) [t^h a ɪ] (娘) [tʔ a ɪ] (仮面)

2.1.3 タ行子音・ダ行子音の混同と母国語の影響

先に述べたように、タ行子音・ダ行子音の混同は台湾・韓国の両者に顕著に認められるものの、そこには音声的環境による著しい差があり、両子音の聞き取りの成績は語頭では台湾が、語頭以外では韓国が、それぞれ、よかった。私はこれには母国語の影響を見逃すことができないと考える。

台湾の日本語学習者にとっては日本語のタ行子音・ダ行子音を一般に次のように捉える。

タ行子音は、有気音 [t^h] で、ダ行子音は無気音 [t] で捉える。

次に韓国の日本語学習者は日本語のタ行子音・ダ行子音を一般に次のように捉える。

タ行子音は、語頭にあつては激音 t^h 、語頭以外にあつては濃音 $\text{t}^?$ で捉える。

ダ行子音は、語頭にあつては平音 t 、語頭以外にあつては母音間の平音 d で捉える。

2.1.3.1 語頭以外のタ行子音・ダ行子音

以上を踏まえて、本題のタ行子音・ダ行子音の混同の問題について考えて行く。順序として語頭以外のタ行子音・ダ行子音の混同から述べる。

語中のタ行子音・ダ行子音の日本語の音声、台湾語・韓国語を母語とする日本語学習者が両子音を母語のいかなる音声でとらえる傾向が強いかについて、すでに述べたことを整理して示すと表2のようになる。

表2

	日本語	学習者の母語	
		台湾語	韓国語
語中のタ行子音	[t]	[t ^h]	[t [?]]
語中のダ行子音	[d]	[t]	[d]

これによって見ると、語中のダ行子音 [d] は韓国語を母語とする者の音声、語中の平音 (ㄷ) [d] と一致している。これに対し、台湾語を母語とする者では、語中のダ行子音に対し無気音 [t] で対応させている。この無気音の [t] は日本語の語中のタ行子音に極めて近い音声である。台湾の輔仁大学で日本語の特徴について講演したあと、学生から次の質問を受けたが、これはこの間の事情を象徴的に物語っている。学生は黒板を使いながらこう尋ねた。

日本人はなぜ「あなた」を「あなだ」と発音するのですか。

日本語の語中のタ行子音は気音を伴わないため、日本人の発音する「あなた」の「た」が台湾の学生には「だ」として受け取られていることが分かる。台湾語に無声音と有声音の対立がないため、有声音の [d] と有気音を持たない無声音 [t] とは同じ音声として捉えられているのである。ここに台湾において語中のタ行・ダ行子音の混同の多い理由がある。

なお、語中のタ行子音とダ行子音のどちらが混同が多いかという点、前者の正答率が平均53.74 (2年生)、42.64 (3年生) であるのに対し、後者の正答率が平均67.27 (2年生)、68.90 (3年生) であるところからみて、語中のタ行子音の方が難しいこ

とが分かる。つまり、タ行子音が語中で無気音になることが台湾語を母語とする者にとっていかに聞き取りを難しくしているかを知ることができる。

なお、「あなた」「驚く」が目立って低い数値であることについて一言しておく。「あなた」は調査2の方法をとったが、選択肢の中に [anat^ha] というかなり強い気音を伴う1項を入れたために、それにまどわされてそれを選んだ学生が多いことがその理由である。また、「驚く」もやはり調査2の方法をとっているが、正解の [odorokw] の [d] をマスター・テープでは多少際立たせて発音したため、[d] に有声音でありながら弱い気音が入り、一方、正解でない [otorokw] の [t] には無声音ではあるが気音が入っていないために、このような結果を招いたと考えることができよう。

これに対し、韓国語の日本語学習者は、語中のタ行子音を語中の平音 (ㄷ), つまり、[d] で捉える。この音声は日本語のタ行子音と同じ音声であると言ってよい。そして語中のタ行子音を濃音 (ㄷ) [t²] で捉える。これは声門閉鎖を伴ってはいるが、日本語の語中のタ行子音である [t] とは気音を伴わない無声音であるという点では共通している。また、日本語で促音や撥音に続くタ行子音は声門閉鎖を伴うことが多い。例えば次のように。

[itt²a] (行った) [anat²a] (あなた)

だから日本語の語中のタ行子音、気音を伴わない [t] を聞いた時、これをタ行子音と認めるような危険は台湾よりもずっと少ないと言える。

以上から、語中のタ行子音・タ行子音について、韓国語を母語とする者の方が台湾語を母語とする者よりも成績のよい理由が明らかになったと考える。

2.1.3.2 語頭のタ行子音・タ行子音

次に語頭のタ行子音・タ行子音について、なぜ台湾の方が韓国よりも成績がよいかを考えたい。

日本語の語頭のタ行子音・タ行子音を台湾語・韓国語を母語とする者がどう捉えているかを、表2に準じて表3として示す。

表3

	日本語	学習者の母語	
		台湾語	韓国語
語頭のタ行子音	[t]	[t ^h]	[t ^h ~t]
語頭のタ行子音	[d]	[t ⁽²⁾]	[t]

まず、台湾の場合から考える。日本語の語頭のタ行子音 [t] には、先にも触れたように、多くの場合軽微な気音が加わり [tʰ] となる。それは台湾語の有気音や韓国語の激音に比較すると目立たないが、台湾ではこの軽微な気音を手掛かりに、タ行子音として認知する。この気音を欠く場合には、台湾ではダ行子音として認定される危険をはらんでいるが、調査に使用したマスター・テープでは、語頭のタ行子音は項目により多少の差はあるが、常に軽微な気音を伴って発音されている。

先に韓国の日本語学習者は、日本語の語頭のタ行子音をその軽微な有気音に注目して韓国語の激音 ㅌ [tʰ] で捉えたとした。この限りでは問題は少ない。ところが実はかなり多くの学生は語頭のタ行子音を平音 ㅌ で捉え、より日本語に近い音声としてそのように発音するように教育されるという。そしてその捉え方が、韓国語の平音 ㅌ は非弁別的特徴として軽微な気音を伴っているので自然でもある。事実、日本人学生に「タ」の発音として、平音を伴う ㅌ、激音を伴う ㅌʰ、濃音を伴う ㅌ̃ を聞かせ、どれが最も日本語の「タ」に聞こえるかを尋ねると、平音を伴う ㅌ であった。そして激音を伴う ㅌʰ は言うに及ばず、濃音を伴う ㅌ̃ も「タ」とは聞こえないという回答を得た。しかし、日本語のタ行子音を声門閉鎖なし、強い気音なしの平音で捉えることにより、日本語の語頭のダ行子音をも平音 ㅌ で捉えているところから、当然のことながら両子音の深刻な混同への道を歩むことになったのである。

ここに台湾の方が語頭ではタ行子音・ダ行子音の成績が韓国よりも良い秘密があった。なお、台湾の日本語では、日本語の語頭ダ行子音の非弁別的特徴として声門閉鎖を伴うことにより、日本語の語頭のダ行子音の実際から遠ざかる一方で、台湾の日本語のタ行子音とダ行子音の混同を少なくしていると言える。

以上、タ行子音・ダ行子音の混同について述べた。ここで言えることはタ行子音・ダ行子音の混同と言っても、これを一括りにせず、母語の特徴を踏まえたうえでの教授者側の配慮が必要であるということである。

2.2 ガ行鼻音

調査語「英語」の「語」の部分の音声として [ŋo] を答えた者の数値を、地域別・学年別に示すと次のとおりである。

台湾	Ⅱ	34.0	Ⅲ	24.1
韓国	Ⅱ	69.7	Ⅲ	80.6

台湾に比し韓国の方がガ行鼻音を正しいとする者の回答率が極めて高いことが分かる。ここには日本語教育におけるガ行鼻音の両者の指導の問題ということもあろうが、

それとは別におのおのの持つ母語の事情が潜んでいることも忘れてはならない。

台湾語には [ŋ] の音声は次の場合には存在するという。

「黄」 [ŋ]

この場合の [ŋ] は ‘syllabic’ な [ŋ] であって、「3回」[saŋkai] の [ŋ] にかなり似た音声である。また、次の例を見てほしい。

「東」 [taŋ]

この場合の [ŋ] は英語の ‘thing’ [θiŋ] やドイツ語の ‘Ding’ [diŋ] (物、英 thing) に現れる [ŋ] と同じで音節末に現れる。

このように台湾語には軟口蓋鼻音 [ŋ] は存在するが、日本語のガ行鼻音のようにŋVの構造をとることはない。

一方、韓国語では [ŋ] は語尾に現れるほか、日本語と同じように、ŋVという構造をとる語がある。例えば、〈붕어〉(金魚)は [puŋo] と発音される。文字のうえで〈pug-ㅁ〉のように書かれるが、実際の発音は [puŋo] である。

日本語教育におけるガ行鼻音の両者の取り組み方の相違も考えられようが、台湾語と韓国語のŋVの有無という構造上の違いがガ行鼻音の聞き取りの成績に大きく関与していることは否めない事実であろう。

2.2.2 日本語におけるガ行鼻音の実態と日本語教育におけるガ行鼻音の指導

日本語におけるガ行鼻音の実態を見ると、ガ行鼻音は標準語 母体である東京語でも次第に衰退の道をたどっている。

加藤正信 (1983) によれば、東京都文京区根津におけるガ行鼻音とガ行非鼻音の推移はほぼ次のようであるという。

男性では昭和16年生れまでが鼻音 [ŋ] を保有し、昭和17年以後の出生者に非鼻音 [g] ないし [ɣ] が目立って来る。

女性では昭和13年生れまでが鼻音 [ŋ] を保有し、昭和14年生れからが非鼻音 [g] ないし [ɣ] を持つようになる。

詳しくは同論文を参照されたい。これを見ると東京下町根津ではほぼ50歳台なかばを分岐点としてそれ以下の世代ではガ行鼻音を欠き、ガ行鼻音はそれ以上の世代にしか保有されていないことが分かる。従来標準語とされてきたガ行鼻音ではあるが、おそらく東京語から完全に消失する日は遠いことではない。従来ガ行鼻音を保有されるとされた地域でも、一様にガ行非鼻音化傾向が進んでいる。

ガ行鼻音はこのような状況にありながらまだ標準語の地位を保っている。発音辞典

の類もそうになっている。

……この [ᵑga] 行音も [ga] 行音も退行して行く傾向ではあるが、後者はとくに柔かみを感じさせる特長もあるから、共通語として望ましいものである。

(NHK編『日本語発音アクセント辞典 改訂新版』1985)

また、NHKをはじめとする放送でもガ行鼻音は新人アナウンサーの音声教育の重要な眼目として今も取り上げられている。だが、NHKでもガ行鼻音の非鼻音化に歯止めはかけられないと見たのであろうか。次のような見解も見えはじめた。

これまで、ガ行鼻音はことばの響きを柔らかくにするとして標準的な発音の1つに数えられ、現在NHKのアナウンサーも新人研修などで、鼻濁音教育を受けている。しかし、全国的にこの音を発音できない若者が増えている現状からすると、将来も標準音として存続するかどうかは何とも言えない。(NHK放送文化研究所編『ことばのハンドブック』1992)

少し前のことになるが、長野県の言語障害児教育の研究会に招かれて出席したところ、研究発表のテーマの一つに、言語障害児にガ行鼻音をどう教えたらいよいかの実践例の報告があって驚かされた。軟口蓋子音である [g] の発音の習得さえ難しい言語障害児に、障害のない児童・生徒さえ習得していないことが多くなったガ行鼻音 [ŋ] をどうして教育する必要があるのかと考えざるを得なかった。

さて、日本語教育の中では依然としてガ行鼻音は習得すべき重要項目の一つとして扱われている。日本語教科書の類をひもといてみても、ガ行鼻音についてスペースを割いているものが多い。先年、ブラジルの日本語教師の日本語教育研修会に出席したおりに、言語障害児の研究会の場合と全く同じ種類の研究発表のテーマがあった。

日本語教育においてガ行鼻音の教育はやめる時期に来ていると私は考える。それはガ行鼻音とガ行非鼻音の現状から言っても当然の帰結であるが、それを支えるものにガ行子音の歴史的変遷がある。語中のガ行子音を語中のバ行子音・ダ行子音との関連で見ると次のようになる。

	中世末京都語	現代標準語
バ行子音	-b-	-b-
ダ行子音	-d-	-d-
ガ行子音	-g-	<input type="text"/> -g-

歴史的には、ha`ba>haba (幅) ha`da>hada (肌) に見られるように、-b->-b-、-d->-d-のような推移をとって現在に至っている。そうすると、ka`gami (鏡) のような語も前鼻音を落として kagami (鏡) のように非鼻音となる。つまり、-g-

は-g-として 部を埋めるのがむしろ体系的であるとさえ言える。-g-が-g-となったのは、両唇鼻音である m、歯茎鼻音である n に対して、軟口蓋鼻音の位置がいれば空き間となっていたので、当座-g-としてそこに取まっていたと見られる。

以上を考えると、先の結論——日本語教育においてガ行鼻音の教育はやめる時期に来ている——は首肯されるべきものである。そして韓国においてガ行鼻音の回答率が極めて高率であるのは、教育の成果が上がっているという点で皮肉であるとも見られる状況である。日本語の現状を見極めたうえで、硬直した姿勢ではなくしなやかな対応がなされるべきである。

2.3 「生徒」の「生」、「英語」の「英」の音声

「生徒」の「生」、「英語」の「英」などの母音部分を [e:] (エー) と長母音で発音するか、それとも [ei] (エイ) と連母音で発音するか、どちらをよしとするかを調査した。その結果を表 2 としてまとめた。表を参照されたい。

語	音声	台 湾		韓 国	
		Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ
生 徒	e:	50.0%	23.4%	39.6%	33.3%
	ei	50.0	76.6	60.4	63.9
英 語	e:	28.0	27.5	27.9	27.8
	ei	72.0	72.4	72.2	72.3

全体としては、台湾でも韓国でも、[e:] (エー) よりも [ei] (エイ) をよしとする者の方が遥かに多いことが分かる。当然のことながら、この背景には、日本語におけるこれら漢語の正書法、「生」に対する「せい」、「英」に対する「えい」の影響がある。あるいは台湾や韓国に移住した日本人に、これらを [ei] (エイ) と発音する九州出身者が多く、その影響のあったことも考えられるが、それについては確認するだけの材料は持っていない。私は、しかしながら、その蓋然性は少ないと見る。

ところでこの音声について、日本人学生はどのように意識しているか。信州大学人文学部学生を対象に調査を行った（1988年）。調査は次のとおりである。

表 3

語	音声	日常生活では	標準語では
生徒	e:	82.3%	12.5%
	ei	17.7%	87.5%

「生徒」を日常生活ではセイトと発音しますか、それともセートと発音しますか。また、標準語の発音はセイトですか、それともセートですか。

その結果を表3によって見られたい。日常生活ではセートを82.3%の学生が使うと答えながら、標準語はセイトだと87.5%の学生が意識している。両者の数値はまさに逆転している。この標準語意識の背景には正書法の「せいと」の表記が影響を与えていると考えられる。

では、この点について標準語の音声はどうなっているのだろうか。幾つかの辞書その他にあたってみるが、この部分の記述はいずれもある曖昧さを含んでいる。1、2を次に紹介しよう。

「経験」、「性格」など漢語系統の「エイ・ケイ・セイ……」は、日常自然な発音では長音になる。

放送でも、原則として長音で発音する。ただし、一音一音明確に言う場合には、

「エイ・ケイ・セイ……」となることがある。

〈例〉

経験 { 自然な発音では ケーケン
一音一音明確に発音すると ケイケン

これはNHK編『日本語発音アクセント辞典 改訂新版』の「解説・付録」からの引用である。他の説明もこれとほぼ同じである。この中であって今田滋子（1992）はこの点かなりはっきりと述べている。

「映画」「学校」などの長（母）音は、改まった場合には [ei] [ou] と意識して発音されることもある。教会では「エイエン（永遠）なる神のエイコウ（栄光）」と唱える方が重みがあり、「エーエン」、「エーコー」では少し軽く響くと思われるのであろうか。芝居の役者や歌手なども [ei] [ou] と丁寧に発音するようである。

一方、最近の傾向として、若い人の間では、正書法の影響からか「えい」[ei]「おう」[ow] がふえつつあるとも聞く。しかし、『NHK新アナウンス読本』では [e:] [o:] と発音するように訓練する。現代東京語では、一応 [e:] [o:] が一般的とされているので、日本語教育のクラスでも「エーカ°」[e: ɲa]、「ガッコウ」[gakko:] と指導した方がいいであろう。

ただし、上の引用で、教会で軽く響くのを避けるために、また、役者や歌手などが丁寧にそれぞれ、[ow] (オウ) と発音する点や、若い人の中で [ow] (オウ) が増えているという記述に、私は資料を持ち合わせていないものの、若干の疑問を持つ。だから日本語教育でエーカ° [e: ɲa]、ガッコウ [gakko:] と指導した方がいいであろうという部分に対しては、丁寧な発音としてガッコウ [gakkow] も消極的には許容してもよいかのような印象を与えるのはいかがかと思う。別の機会に、輔仁大学2年生に「小学校」「工場」の発音としてどれがよいかの聞き取る調査を行った。テープから流れる音声のうち、オウ [ow] をよしとした者は、「小学校」で4分の1、「工場」で3分の1を、それぞれ、超えていた。むしろオウ [ow] を「間違い」として指導すべきだと思うのがいかがであろう。

日本語教育において、また、国語教育において、漢字音の「生」や「英」の音声について、実態をよく踏まえたうえで一定の指針を出すべき時期に来ている。その意味で今田滋子 (1992) がこれらの音声としてエー [e:] を指導すべきだとしたのは評価してよい。

2.4 「十本」の「十」の音声

「十本」の「十」をジッと発音するか、ジュッと発音するかの問題について考えよう。今、ジッとジュッだけに限って数値を計算すると表4のようになる。数値の和が100にならないのは、ジューホンだのジューボンなどの回答があるためで、これらは表から省いた。

表4

		台 湾		韓 国	
		Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ
十 本	ジッ	62.0	33.3	88.4	75.0
	ジュッ	30.0	63.0	4.7	22.2

台湾、韓国ともに学年差のかなり認められる項目である。両者ともジッは2年生に多く、3年生では減少し、代わってジュッが増加する。特に台湾ではその数値は逆転するほどの変動を示す。

さて、日本では「十本」のほか「十階」「十干」「十戒」「十種」「十進法」「十杯」などの「十」の音声は、ジッと発音する従来型から、ジュッと発音する新しい型へと替わりつつある。台湾・韓国の調査に先立って信州大学人文学部学生を対象に「十階」を調査語として資料を収集した。「ジッカイと言うか、ジュッカイと言うか」の問いに対しては、94.8%の学生がジュッカイを言うという回答を寄せている。また、「ジッカイとジュッカイのどちらが標準語の発音だと思うか」の質問に対しても、77.1%がジュッカイを標準語の発音だと答えている。

表5

	友人と	先生と	テレビで
ジッ	5.9%	11.8%	11.8%
ジュッ	94.1%	88.2%	88.2%

地域を変え広島の大学で「十本」を調査語として、「友人と話す時」「先生と話す時」「テレビに出演した時」の3場面を設けて調査した（広島女学院大学、1993）。その

結果を表5として示す。場面を問わずジュッ一色であると言ってよい。言われるように、これは「じゅう」(十)の音韻に引かれてジッからジュッへと変わったものである。

さて、国語史のうえからこの表記法を見ると、ジッが正しいことは周知のとおりである。国語辞典の類ではこの辺をどう扱っているか。その幾つかにあたってみると、辞典によってその扱いはほぼ3通りに分かれる。

1) ジッのみを載せる辞典

『日本国語大辞典』(1974), 『広辞苑 第4版』(1991), 『大辞林』(1988)

『例解新国語辞典』(1984), 『新潮現代国語辞典』(1985) ……

この態度を採る辞典は現在でも結構多い。

2) ジュッを許容する辞典

『明解日本語アクセント辞典 第2版』(1981), 『新明解国語辞典 第4版』

(1989), 『三省堂国語辞典』(1992) ……

この態度を採るものの代表として『明解日本語アクセント辞典 第2版』をとると、「十本」は次のように載る。

ジッポン、ジュッポン 十本

そして「ジュッポン」にあたる個所にはその見出しはない。この立場を採る辞典は1)に次いで多い。

3) ジッとジュッを対等に扱う辞典

『日本語発音アクセント辞典 改訂新版』(1985) ……

この辞典で「十指」をみると、ジッシの個所とジュッシの個所に、それぞれ、次のように載る。

ジッシ、ジュッシ 十指

ジュッシ、ジッシ 十指

つまり辞典類では従来型を正しいとするものが多く、ジュッを許容するものがそれに次ぎ、ジッとジュッを対等に扱うものはまだ少ないと言える。

元に戻り、台湾と韓国にジッが多いのは、日本語教育の成果も考えられるが、母語における「十」の音声の影響も無視できないように思う。

「十」台湾文語 [ʃip] 北京官話 [si:]

韓国語 [ʃip]

台湾語文語、韓国語の音声に見られる語末の [p] は内破音 (implosion) であって外破音 (explosion) ではない。いずれにしてもこれらの音声は「じっ」→「じゅっ」の変化を妨げる役目を果たしていることと思う。

それでは台湾でも韓国でも2年生よりも3年生に、まだ標準語としての資格を獲得していないジュッの多いのをどう解釈したらよいか。

私は彼等が日本語の習熟とともに、日本人、特に若い日本人の日本語への接触が増えたことに原因がありはしないかと思う。

変化の大きい輔仁大学をとると、ここでは3年生の多くが夏季休業中に南山大学(名古屋市)に日本語の研修に出かけるという。ここで彼等は若者の日本語に接してその影響を受ける。その影響の一つがジッ>ジュッではないかと考えられる。もしそうだとすると、この変化は教科書的日本語から実用的若者日本語への脱皮の一つの現れとも見ることができる。

ここでも問われるのは、日本語教育におけるこれらの「十」の発音の取り扱いである。ジッを教えるべきか、ジュッを教えるべきか、あるいは両者を認めるべきかを早急に決める必要がある。私見ではガ行鼻音とは異なり、標準語音としてジッを教えるのがよいと考える。そして新しい発音としてジュッが行われていることを付け加えればよい。ガ行鼻音の場合のような体系化の問題もここにはないし、発音の難しさもない。そして国語教育でもジッの教育を同時に行うべきことは言うまでもない。⁽³⁾

2.4.1 (参考) 漢語のシュ・ジュの音声について

「十本」「十階」などの「十」のジッ) ジュッの傾向とは言わば逆に、漢語の「輸出」「手術」などに現れるシュ・ジュが、それぞれ、シ・ジに発音される傾向が、東京語などにある。これらの語については台湾、韓国で調査を行ってはいないが、日本語音声教育・国語音声教育の中で取り上げるべき項目の一つであると考え、参考として述べる。

漢語のシュ・ジュの音声については、『テレビ・ラジオ新アナウンス読本』(1964)以来ある曖昧さを含んでいる。この書は、「下宿」「輸出」「新宿」「千住」「手術」のような例をあげて、若干の説明のあとこう述べている。

以上シュ→シ、ジュ→ジの現象は、ここにあげたようなものは標準語として認められていますが、その他の場合には必ずしも認められるとは申せません。

つまり、「下宿」以下の語ではシ・ジの発音を標準語として認めるという立場である。この立場は『ことばのハンドブック』(1992)でもほぼ引き継がれている。次のように述べている。

こういった実態を考慮して、放送では、〔シュ〕〔ジュ〕を含むことばの中でも特に発音しにくいものは、〔シ〕〔ジ〕に近く発音してもよいことにしている。それには、「新宿・原宿」のほかに、「下宿・野宿・宿題・学習塾・出陣・外出・美術・著述」などの語が含まれる。

しかし、〔シュ・ジュ〕を〔シ・ジ〕に近く発音することによって、違った意味のことばに聞きとられるおそれのある時は、明確に〔シュ〕〔ジュ〕と発音しなければならないことは言うまでもない。「出典」と「失点」、「出頭」と「執刀」などの場合がそれである。

上の記述で、特に発音しにくいものという基準が曖昧であるが、ともあれ、「シュ・ジュをシ・ジに近く発音してもよいことにしている」という点に少し問題がありそうである。シュ・ジュを正書法どおりにシュ・ジュと発音する地域はかなり広く、その数はかなり多いと想像される。この点を見捨て、シュ→シ、ジュ→ジという、言うなればズーズー弁化とも言える東京語のこの種の音声容認しようとするのは、少々うなずけない。日本語教育では、これも国語教育についても言えることだが、シュ・ジュをきちんと教育すべきである。教育が可能であると考えからである。

2.5 特殊拍をめぐって

「撥音」「促音」「長音」では、「拍音素」という単位が台湾語にも韓国語にもない

ために、若干の問題をはらんでいる。それは大きく三つに分けられる。

- 1 聞き取りにあたって拍音素を聞き逃す。例、びょいん（病院）、きていてください（切って行って下さい）……
- 2 聞き取りにあたって拍音素のないところに拍音素を入れて聞く。例、デパート（デパート）、バース（バス）……
- 3 聞き取りにあたってある拍音素を別の拍音素として聞く。例、きいていってください（切って行って下さい）、びょいん（病院）……

「撥音」「促音」「長音」に分けてみると、調査項目の選定にも問題があるかもしれないが、「撥音」の聞き取りは一般に成績がよく、「促音」「長音」に若干の問題が認められた。そしてこの場合、個々の細かな数値はあげないが、台湾の方が成績がよく、韓国に問題が少しあった。

「促音」について「切って行って下さい」の聞き取りを例にとる。これは質問法の1によるものだが、台湾では2年生91.9%、3年生100%が正しく聞いているのに対し、韓国では2年生65.1%、3年生77.8%とかなり成績が低い。私はその理由を次のように母語の特徴の中に求めるが、どうであろうか。

韓国語を母語とする日本語学習者は、日本語の語中のタ行子音を濃音ㄷ [tʰ] で聞き取り、また、その音声で発音する。そのことは語中のタ行子音の聞き取りによい効果をあげたが、促音の聞き取りには障害となった。つまり、「切って行って」の促音部をみずからの日本語音声タ行子音 [tʰ] の声門閉鎖の持続部の中に組み入れて聞いてしまったのである。そこには日本語音声において促音の次のタ行子音が声門閉鎖を伴って発せられることが多いことを考えに入れるべきであろう。

長音については上にあげた1、2に問題があり、韓国にその感が深い。調査語の中から「デパート」を取り上げると、「デ」というCV構造をCRV構造と聞き取った者、「パート」というCVRCV構造をCVCV構造と聞き取った者を合わせると、台湾では2年生14%、3年生6.6%であるのに対し、韓国では2年生32.5%、3年生20.1%と、ともに台湾を上回る。また、「バス」についてみると、CVCV構造をCVRCV構造、ないしCVCVR構造ととらえた者を合わせると、台湾では2年生4.0%、3年生3.3%とごく少数であるのに対し、韓国では2年生39.5%、3年生33.4%の多きに達する。

私はこの点についても母語の干渉がからんでいると見たい。韓国語では長母音と短母音の対立は、一口で言えば、現代韓国語では「ない」と言った方がよいようだ。韓

国語で「目」は [nun]、「雪」は [nu:n] で一、二の語に母語の長短の対立が認められるとは言うが、正書法が〈눈〉と同じであることもあり、この区別を持たない人も多いという。

一方、台湾語も母音の長短の対立を持っていないが、台湾の学生がこの点について韓国の学生よりも問題が少ないのは、次のような事情があるからだと考える。それは台湾語では入声音の有無の対立があり、入声音のある母音音節は一般に短く、それのない母音音節は一般に長く発音されるという事情が働いていると考えるのである。入声音の有無という弁別の特徴が、結果として母音の長短という現象を生んだ。この点が幸いして台湾では母音の長短という点では比較的問題が少なかったのではないか。

3. アクセント

3.1. アクセント調査とその結果

すでに述べたように、アクセントでは1拍語4語、2拍語6語、3拍語4語（いずれも名詞）について、調査法2に準じた調査を行い回答を求めた。個々の語について見て行く紙幅の余裕はないので、拍ごとにまとめた正答率を表6として示す。選択肢

表6

拍	台 湾		韓 国	
	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ
1	60.0%	62.5%	48.3%	52.8%
2	46.7	51.7	25.6	30.6
3	47.0	51.5	28.5	31.3

が1拍語が二つ、2拍語が三つ、3拍語が四つある。したがって韓国の場合、その数値から見て、アクセントの識別能力はゼロまたはそれに近いと言える。それに対して台湾の場合は相応の成績をあげていると言える。

この数値の差は何によるかと言えば、アクセント

教育を行っている台湾と、それを行っていない韓国との差が現れたものと言える。そしてその根底にはそれが行える声調言語を母語とする台湾の学生と、それを行うことがかなり難しい無型アクセントを母語とする韓国の学生という質的な相違がある。

3.2 台湾・韓国の日本語学習者の型選択の傾向

型選択の傾向について台湾と韓国を比較した場合、1拍名詞と2拍名詞ではそれほ

どははっきりした差を見せないが、3拍名詞では明瞭な差が現れる。今、3拍名詞における両者の型選択の数値の平均を出すと表7のとおりである。⁽⁴⁾最高値と最低値とを比較

表7

拍	台 湾		韓 国	
	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ
0	47.5%	60.0%	19.2%	21.6%
1	7.0	5.8	21.5	21.6
2	14.5	14.2	26.8	24.3
3	24.5	14.2	20.4	20.1
?	6.5	5.8	7.0	12.5
NR	0	0	5.3	0

すると、台湾では2年生40.5%、3年生54.2%であるのに対し、韓国では2年生7.6%、3年生4.2%であり、両者の差は極めて大きい。これは何によるかと言えば、台湾の日本語学習者では平板型が好まれ、頭高型が避けられたのに対し、韓国では型の選択にあたって、台湾に見られるようなはっきりした傾向差がないことに起因する。そして韓国のそれはアクセント教育が行われていないこと、韓国語が無型ア

クセントであるということと無関係ではない。

台湾の日本語学習者で平板型が好まれるというのは、台湾の日本語の一般的傾向として、語の後から2番目の音節にアクセントの山があるという従来の定説ともなっている事実と異なる現象で興味深い。では、なぜ台湾の学生は平板型を選択したか。次節でこれに触れたい。

3.3 輔仁大学の日本語教育におけるアクセント教育

台湾の輔仁大学の日本語教育におけるアクセント教育について、同大学出身の邱明麗氏、莊幼糸氏は次のように語った。

日本語教育では主として中国人教師の授業で単語をアクセントとともに覚えるように指導された。私たちはNHK編『日本語発音アクセント辞典』や金田一春彦監修、秋永一枝編『明解アクセント辞典』でアクセントを1語、1語学習した。そして毎週行われる日本語の試験にはアクセントの問題も出された。その時には

アクセントを数字で書くように要求されることが多かった。アクセント学習は1年、2年の時が主で、3年以上ではそれはなかった。また語のアクセントのはっきりしない場合は、平板型で発音するのがよいとも教わった。

これによってみると、台湾の日本語学習者において平板型の回答の多かったのは、母語台湾語や中国語の干渉ではなく、型の分からない語は平板型で発音するようという、日本語教育の結果であることが分かる。それが従来の定説とも言える台湾の日本語アクセントの型傾向と異なる結果を招来したのである。私は、しかしながら、この指導は当を得たものであると思う。日本語の標準語アクセントは平板型が多いからである。また、現代東京語で起伏型の平板化傾向がかなり顕著であることも、この教育法を支持するものと言える。

少し脇道へそれるが、邱、莊両氏に「鋸」のアクセントを尋ねたところ、二人は間髪を入れず「4」と答えた。この語のアクセントは『日本語発音アクセント辞典』や『明解アクセント辞典』では4、3の順序で並んでいる。大学では複数のアクセントが辞典に載る場合は第1に記されたものを覚えるようにと指導を受けたという。しかし『東京語アクセント資料』によると、21人中の話者のうち全員が3を答えている。4は3人が3とともに答えているにすぎない。つまり辞書記載のアクセントが古すぎて標準語の母体である東京語の実態を反映していないことが分かる。標準語アクセント選定の方法とも関わる問題だが、何をもって標準語アクセントとするかは十分検討すべきテーマである。

3.4 清州大学校の日本語教育におけるアクセント教育

韓国では日本語教育において語アクセントを教えていないようである。韓国清州大学校出身の崔昇浩氏、延鎮淑氏によれば、少なくとも同大学ではアクセント教育は行っておらず、韓国の日本語教育でアクセント教育を行っている事例を聞いたことがないという。台湾と韓国における標準語アクセントの点数の差は、両者におけるアクセント教育の有無によるところが多いと前に述べたが、韓国の日本語教育でアクセント教育を行うべきかどうかは、十分に慎重に論議されなければならないところである。

ソウルに近い清州大学校の学生達全員または大部分は、アクセントを持たない韓国語地域の出身であると考えられる。かかる学生に日本語のアクセントを教えるのは、台湾の場合よりも格段難しい仕事であることが予想される。台湾の学生達の母語台湾語は7声の区別を持ち、かつ、彼等は北京官話学習の際は1語1語のアクセントを学習するよう教育されている。したがって彼等は日本語よりも複雑なアクセント体系を

持ち、かつ、単語をアクセントとともに学習することに慣れている。韓国の学生の置かれている状況とは異なる。だからと言って韓国の日本語教育においてアクセント教育は意味がないと言っているのではない。一定の努力に対して台湾におけるような効果が上げにくいことを予測したまでである。

韓国人学習者を対象とした日本語のアクセント教育について、山田泉氏に実践報告がある（山田泉、1992）。氏は無型アクセント地域である茨城県南部の出身でありながら、音声学や日本語の音韻論を学んで、標準語アクセントをほぼ習得されたという。この経験をもとに、氏は「明示的」な学習によってアクセントは習得されるとし、韓国人を対象に氏の開発した音声指導を実施されている。それによると、A・Bクラスともに半数近い脱落者が出ているという。このことから予想されるように、アクセント学習にはかなりの困難さを伴っていることが分かる。ただし、同論文ではそれによって日本語のアクセントが具体的にどう習得されたかは必ずしも明らかではない。早い時期の詳細な発表が待たれる。日本語教育におけるアクセント教育は、学習者の日本語学習の目的によって、母語のアクセントを十分に見極めたうえで柔軟に対応する必要がある。

おわりに

以上、台湾・韓国日本語学習者の日本語音声の特徴を述べ、さらに日本語教育への提言を行った。その結論とするところを、後者にやや重点をおいて簡単にまとめると、次のとおりである。

- 1 日本語学習者の日本語音声には母語の干渉が著しく、教授者はこの点に留意して、学習目的に応じ適切で柔軟な教育を行うことが必要である。
- 2 現代日本語で揺れている音声については、いかなる音声も標準語として望ましいかを早急に決め、教授者に指針を与えることが肝要である。このことは国語教育についても同時に言い得る。
3. 1 ガ行鼻音は、日本語から早晩消滅すべき歴史的必然の中にある。このような状況の中で放送などで標準語音声としてガ行鼻音を依然として守って行こうとするのは、決して意味のあることではない。日本語教育ではガ行鼻音の教育はやめた方がよい。
3. 2 「英語」の「英」などをエーと発音するかエイと発音するかについては、従来の曖昧な態度ではなく、エーを採るのがよい。その際、正書法の問題も同時に考えるべき時期に来ている。

3. 3 「十回」の「十」や「新宿」の「宿」などの音声については、従来標準語とされていたものをきちんと教えるべきであろう。そう考えるべき理由があり、ガ行鼻音の場合と異なり、教育が可能であるからである。

4 アクセントの学習については、声調言語を母語とする学習者と無型アクセントを母語とする学習者とは、指導に著しい難易がある。特に後者については、学習目的から何を優先すべきかを考え、その中でこの問題を考えて行くべきであろう。

本稿については今後の問題とすべき点も多い。この調査は初め台湾の日本語学習者を対象に計画され、調査票は台湾語を母語とする者のために作成された。その調査票をそのまま韓国においても適用した。この点韓国の日本語学習者の音声的特徴として調査票に盛らなければならない項目の幾つかが欠落している。今後の課題の第1とすべきものである。また、本稿で述べたものは日本語学習者が日本語音声をどう聞き取るかというものであって、彼等がどう発音しているかの資料分析がこれに続かなければならない。これも今後の課題として重要なものである。

[後記] 本稿は都立大学方言学会（東京都立大学、東京、1993年7月）、及び、輔仁大学日本語日本文学談話会（私立輔仁大学、台湾省新莊市、1993年9月）での口頭発表に若干の補訂を行ったものである。両発表で得たご教示の幾つかは本稿執筆の際、参考とさせていただいた。

資料収集にあたっては次の方々の協力を仰いだ。

台湾 輔仁大学外国語文学院日本語文学系 系主任林水福教授、前系主任山崎陽子教授、2・3年在籍学生。

韓国 清州大学校人文大学日語日文学科 主任金栄順教授、2・3年在籍学生。現地の調査、及び、資料の分析にあたって次の方々の協力をいただいた（敬称略）。

張雪玉（台湾逢甲大学講師）、邱明麗（輔仁大学講師）、莊幼糸（輔仁大学講師）
崔昇浩（名古屋大学大学院博士課程）、延鎮淑、中島（伊藤）祥子（鹿児島大学講師）、宗承姫・胡琇瓊（広島大学大学院修士課程）

また、本稿作成課程で竹田由香里氏（広島女学院大学研究生）の助力を得た。

以上を記して、ご協力に深い謝意を捧げる。

台湾・韓国日本語学習者の日本語の実態については、馬瀬良雄・金子泰子・伊藤祥子（1991）をも参照されたい。

なお、両発表ともに（付）として、台湾語・中国北京官話・韓国語・沖縄語・古

代日本語間における閉鎖音系列の音声の類似の問題を扱ったが、本稿ではこれを省いた。このテーマについては稿を改めて論じたい。

注

- (注1) 調査対象は台湾語(=閩南語)を母語とする者に限った。したがって客家語や北京語を母語とする者は対象から除いた。
- (注2) 両大学とも女子学生に対して男子学生の占める割合が少なかった。輔仁大学では、2年生50名中男性は6人、3年生30人中男性は5人と極端に少なく、このため本稿では性差を論じることは断念した。
- (注3) もしもジツ>ジュツを認めると、それに応じて「執行」「執刀」「執筆」などの「執」も「シュツ」と読んでもよいことになる。
- (注4) 表の型の欄で、1~3はアクセントの型、?は「分からない」の回答、NRは無回答である。

参考文献

- 今田滋子(1992)『発音 改訂版』凡人社
- NHK編(1985)『日本語発音アクセント辞典 改訂新版』
- NHK放送文化研究所編(1992)『ことばのハンドブック』
- 加藤正信(1983)「東京における年齢別音声調査」(井上史雄編『〈新方言〉と〈言葉の乱れ〉に関する社会言語学的研究』)
- 金田一京助ほか編(1989)『新明解国語辞典 第4版』三省堂
- 金田一京助ほか編(1992)『三省堂国語辞典 第4版』三省堂
- 金田一春彦監修・秋永一枝編(1981)『明解日本語アクセント辞典 第2版』三省堂
- 柴田武監修、馬瀬良雄・佐藤亮一編(1985)『東京語アクセント資料』
- 新村 出編(1991)『広辞苑 第4版』岩波書店
- 日本大辞典刊行会(1972)『日本国語大辞典』小学館
- 松村明・三省堂編集所編(1988)『大辞林』三省堂
- 馬瀬良雄・金子泰子・伊藤祥子(1991)『台湾・韓国日本語調査報告書』
- 山田泉ほか(1993)「外国人留学生に対する日本語音声教育の試みー 韓国人留学生を中心にー」(『日本語音声』研究成果刊行書『日本語音声と教育』)

(ませ よしお・広島女学院大学教授)